

事が長期間中断した例など、特に中東のように政情不安定な国での工事は、日本で考えられないような困難さが伴う。

数多く出会った技術者の中でも、昭和 57 年 7 月南部前戦の町バスラで会ったドイツ人技術者は今でも強く印象に残っている。当時 30 万人と推定されるイラン兵が、バスラ東方 20~30 km の国境付近に集結し連日激しい戦闘が続いていた。近郊には 500 名近い日本人の土木・建築・プラント関係者がおり、各社の代表者と私は避難方法等につき連日協議していた。同地区には西ドイツ・オーストリア連合がバスラ空港新設工事を施工中であり、参考のためサイトを訪問し対策につき打ち合せた。

ドイツ人の建設所長は「2千人がここで働いており、紛争の状況により全員避難も検討している。ただ、情報がないため、自分で毎朝最前戦まで車で行き状況の変化を観測している。部下の報告では判断を誤る可能性もあり、自分の目と膚で実態を確認しなければならない。それがリーダーとしての責任である」と熱っぽく語った。

土木技術者は、時として高度な判断が必要とされる。その場合、正しい情報をいかに迅速に入手するかが最も重要である。

(筆者・Toshiji TAKATSU, 日本国有鉄道
下関工事事務所 調査課長)

酷しい環境の中で

吉久泰雄



過去においてイランは食糧の自給国であったが、今では主食さえも輸入に頼っている。莫大な石油収入を背景に、「20年以内には、世界の偉大な先進国の先頭に立つ」と豪語して、故パーレビ国王は強引に近代化を押し進めた。その結果、国内の一次産業は崩壊し、農業人口は極端に減少してしまった。現在では、石油の40%を食糧の輸入に充てていると言われている。世界的に科学技術の片寄りが著しい今、成功した工業化と言えども、脱石油経済を確立する事が困難なのは、他の第三世界の国々の例でも明らかである。

1979年のイスラム革命を経て、再び農業振興に重点をおいた政策が取られる様になった。建設奉仕体と呼ば

れる組織が作られ、細々とではあるが、道路、灌漑用水等の工事に従事している。面積だけからみれば、日本の4倍という国土をもち、豊かすぎる程の太陽に恵まれたこの国が農業国として自立していこうという姿勢には好感を覚える。

ペルシャ湾に流れ込むカロン川の水を、導水トンネルによって内陸の乾燥地域に導くプロジェクトに従事して7年になる。16世紀にアッパース大帝が計画、着手、挫折してから400年後の今、その夢が実現した。「死んだ水を生きかえらせる仕事には、男のロマンがある」と語る上司の言葉には全く同感である。工事中に汲み上げられた地下水で、見渡す限りの不毛の土漠が、たちまちのうちに農耕地に変えられていく様を目の当たりにすると、確実に社会のためになっていると感ずることが出来る。

イラン・イラクの戦争の激化、石油収入の急激な落ち込み等、とりまく社会、生活環境は厳しい。建設に限らず、ほとんどの経済活動は停滞したままで、現状では先の見通しが全くたたないと言える。しかし、これらの出来事の裏側では、民衆はやはりしたたかに生活を続けている。情勢が鎮静化した後、この国が一番に必要とするものは、土木技術であると思う。

(筆者・Yasuo YOSHIIHISA, (株)熊谷組中近東支店
イスファハン工務所 (在イラン))

海外工事の進め方

和田捷一郎



ゼネコンの技術者として今年で11年間の海外工事(東南アジア・中近東地区)に携わり、コンクリートダム、鉄管、火力発電所や石油精製プラントなどを完成させ、現在はシールド工事に従事している。完成工事に対しては、いずれも乗込みから竣工までを体験したが、海外工事経験者の共通の話題として、いつも下記の問題が提起される。

- ① 現地語・英語が話せない、理解できないので工事が計画どおり進捗しない。
- ② 仕様書の解釈が日本と異なる。また、世界に通用する日本の仕様書がないので、うまく説得できない。
- ③ 調査不足のため、予想しなかった部分で難工事